

地域連携室だより

因島総合病院の学術活動の振り返りと未来への継承

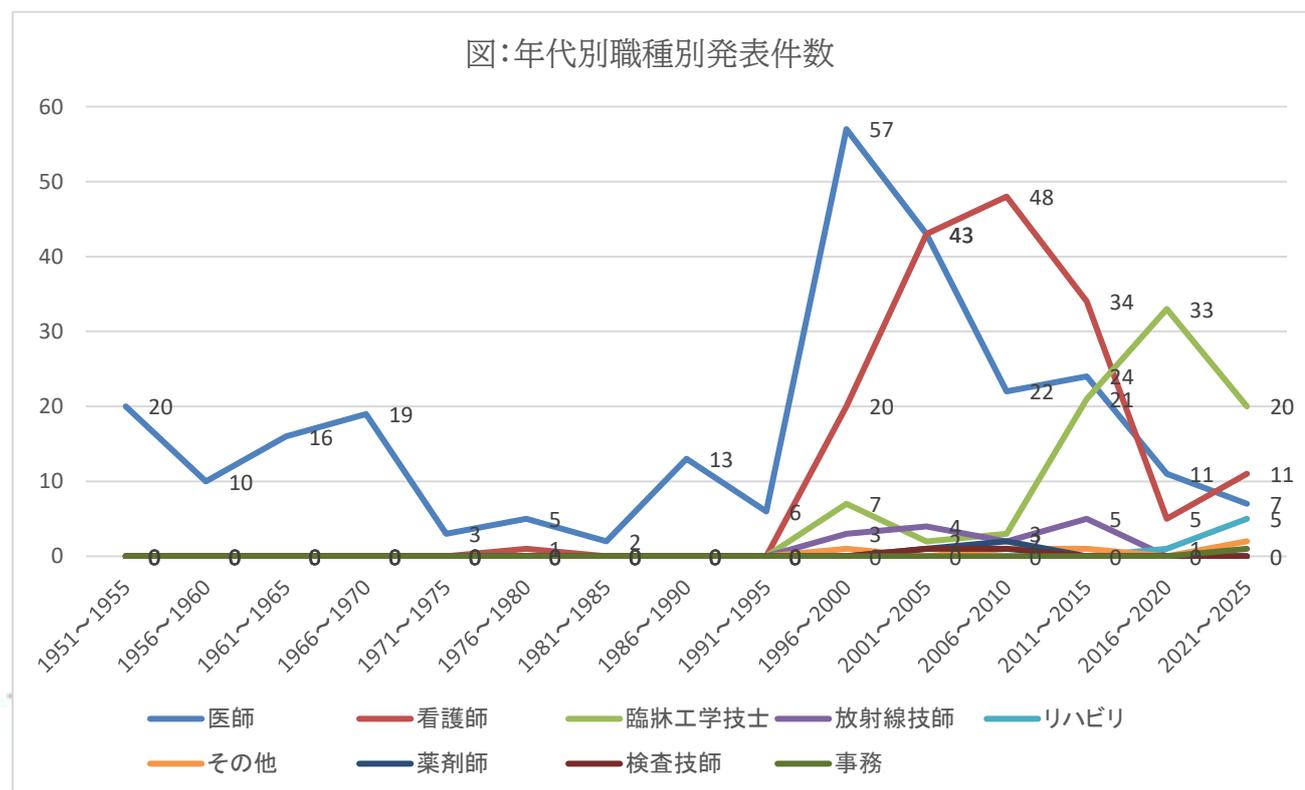
病院長 山本 頼正



因島総合病院は、因島の医療を支える拠点として108年にわたり歩みを重ねてきましたが、2026年3月、因島医師会病院との統合に伴い、その歴史に幕を下ろすこととなりました。今回、地域連携室だよりの最終号として、当院が積み重ねてきた学術活動を振り返ってみました。

「医学中央雑誌」を用いて検索すると、当院の学術の歴史は1951年に始まります。草川一正医師による、日本耳鼻咽喉科学会での「日立因島造船所に於ける職業性難聴患者の治療概況」が、記録に残る最も古い発表です。それ以降、2025年12月までに収録された学術発表は計537件のほり、原著306件、会議録189件、その他42件という内訳でした。職種別では、医師が258件と最多であり、次いで看護師162件、臨床工学技士86件と、多職種にわたる発表が行われていました。年代別(図)では、1950年代から1990年代までは主に医師による発表が中心でしたが、1990年代後半以降に件数が大きく増加し、特に看護師による発表が顕著に増え、その背景には1996年に創刊された「因島総合病院医学雑誌」の存在がありました。

図：年代別職種別発表件数



同誌は、2016年までの約20年間、年1冊のペースで刊行され、当院の学術活動を力強く支えてきました。さらに2010年以降は、臨床工学技士による発表が増加し、2016年以降には医師や看護師を上回る件数となりました。直近の2020年から2025年においても、臨床工学技士による発表が最も多く、加えてリハビリテーション部門からの発表も増加するなど、学術活動の担い手は着実に広がってきました。

「因島総合病院医学雑誌」を振り返ると、当院で経験された症例報告や研究成果が、医師のみならず看護師をはじめとする多職種によって、それぞれの専門性を生かして発信されてきたことが分かります。1996年からの約20年間にわたる同誌の歩みは、そのまま因島総合病院の医療の歴史を刻んだ貴重な記録といえるでしょう。

現在、「因島総合病院医学雑誌」は広島県立図書館や一部の大学病院図書館で閲覧可能ですが、将来にわたり因島の医療の歩みを語り継ぐうえで、極めて重要な資料とされますので、今回、尾道市立因島図書館へ寄贈し、地域の共有財産として後世に残すことといたしました。

因島総合病院が培ってきた学術活動の精神と多職種協同での医療の実践の歩みは、今回の病院統合で多くの職員が因島医師会病院で勤務を続けることで、当院の閉院後も形を変えながら受け継がれ、地域医療の未来を支え続けていくものと確信しています。

これまで長年にわたり因島総合病院を支えてくださいました地域の皆様方に、職員一同、心より感謝を申し上げます。



因島総合病院様へ
生まれたときからずっとお世話
になりました。
ありがとうございました。

患者さんからこんな嬉しいメッセージとお花をいただき、胸がいっぱいになりました。ボランティアで毎週院内に花を活着てくださる患者さんもおられます。長年、多くの先輩たちが、患者さんに寄り添い支え続ける「たすき」を繋いでいただいたおかげです。誠にありがとうございました。

カナデビア健康保険組合 因島総合病院
〒722-2323 広島県尾道市因島土生町 2561 番地
TEL:0845-22-2552 FAX:0845-22-0991

HP <http://innoshima-hospital.jp/> Facebook <http://facebook.com/intobyouin>

発行元/因島総合病院地域連携室 お問い合わせ直通電話:0845-22-0061 FAX:0845-22-4714

詳しくはホームページを
ご覧ください

